

# 棚田保全と人づくり

ノンフィクション作家

遠 藤 和 子

## 1 はじめに

富山県の北西端、能登半島の東側付け根部分に氷見市がある。

東は富山湾に面し、海越しに3000メートル級の立山連峰の姿が浮かんで見える。その絶景のすばらしさは20キロに及び、能登沿岸一帯とともに国定公園に指定されている。

この海岸線から石川県境・能登に向かって、標高50～300メートルの丘陵が広がっている。氷見市は、このような緩やかな起伏の里山が大部分を占める中山間地帯である。

とかく富山県は、江戸時代の儒者室鳩巢が「越中百里，山河壮なり」といったように、北アルプスや飛騨山地を源とした大小さまざまな河川が走っている。いずれも、急峻な山地から発し、流路も短いところから急流河川となっている。ところが、氷見市は丘陵地帯であるだけに流量の少ない小河川ばかりである。このため、昔から水不足に悩まされ、3192個ものため池をつくってしのいできた。

現在、ため池は2000個余りに減っているが、国営総合かんがい排水事業や、県西部水道用水供給事業などによって、水の心配は少なくなってきた。それでも、農業における水の苦労は絶えない。

## 2 長坂集落と「棚田百選」

平成11年、中山間地帯の一角、能登に接する県境近くにある長坂集落

図1. 氷見市（長坂）位置図

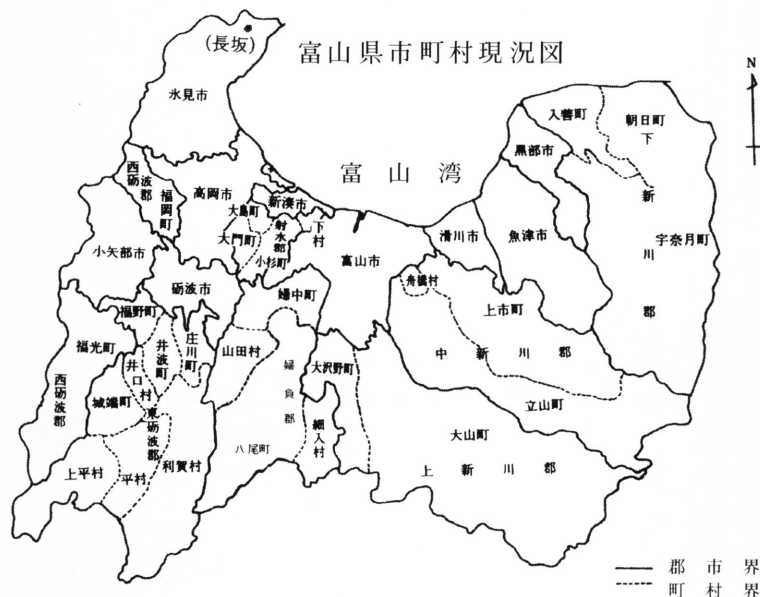


写真1. 長坂の棚田

日本の棚田百選に認定 (平成11年7月26日)



豊かな緑、眼下に広がる富山湾、海越しに立山連峰を望む。  
ここで、棚田オーナー事業を実施しています。

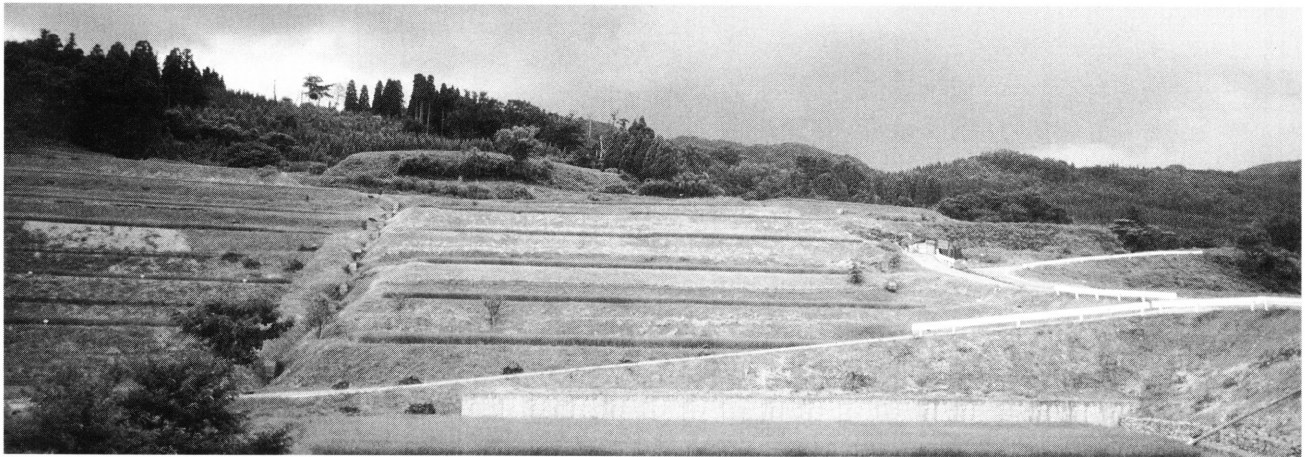
が「棚田百選」に選ばれた。

棚田は面積が小さいうえに農道がない。傾斜地の労働であるため、労力がかかる。したがって生産性が低い。そのうえ、米を取りまく厳しい生産環境や、担い手の高齢化、後継者不足も重なって耕作放棄され、荒廃が目立ってきた。農産物の市場開放が、それに拍車をかけた。

これに対する危機感から「棚田保全」の声が高まり、農水省による「新農業基本法」のなかで、「中山間地保全」が打ち出され、「棚田百選」も選定された。

この棚田百選に、長坂集落が選ばれたのである。集落は標高100メートル、過去の地すべりによってできた緩やかな斜面にあり、世帯数は65戸、人口は201人。至る所に棚田が造られている。

## 写真2. 棚田景観



### 3 自然と共生する棚田

私が棚田に感心を持つようになったのは20年前。3週間振りにイギリスでの取材旅行を終えて帰国したとき、車窓に広がる棚田景観の見事さに心が奪われた。

狭い谷間や、里山の斜面を切り開いて段々状に造り上げられた棚田は、なだらかな牧草地や、リスが遊んでいる公園など、のどかなイギリス風景を見慣れてきた眼に、殊のほか新鮮に映った。そして、日本人の几帳面で、誠実な人間性に触れた思いがするとともに、僅かな土地をも利用せねばならぬ風土の厳しさを知らされた。また、小麦農業や牧畜を主体とするヨーロッパと、稲作農業を主体としている東アジアとの違いにも気づかされ

た。

この風土と農業形態の違いにより、人間中心主義の西欧文化と、自然と共生する東洋文化が、それぞれ醸成されたのであろう。このとき、「棚田は稲作農耕民が造り上げた文化遺産。きわめて美しい日本的な田園風景。ふるさとの原風景」という思いを強くした。

### 4 命を守ってくれる棚田

棚田が「国土保全」の役割を果たしていることを知ったのは、戦国時代の越中国主・佐々成政の取材調査のときである。

成政が在国していた当時は、越後の上杉氏や、加賀の前田氏との間で戦いを繰り返してあり、県内に150近くの城や砦とりでがあった。その多くは山城。なかでも、県東部にあった松倉城は

420メートル余りの山頂に築かれていた。

この松倉城に至る山腹に棚田が点在していた。山道を息を切らしては立ち止まり、また登るという繰り返しのなかで棚田を眺めるにつけ、坂道を上り下りして作業される人たちの姿が浮かび、「棚田の一つ一つに農民の汗が込められている」と、苦労を偲んだ。

また、棚田は農民の知恵と工夫によって創り上げられた農耕技術の粋であることも知らされた。すなわち、上の段から下の段へと順々に水を落として、貴重な山水を有効に活用し、大量に降った雨を斜面に築いた畦でつぎつぎに受け止めるなどして、万全の保水機能が施されていた。

それはまた、急激に押し寄せる豪雨の流出を防ぐ緑の貯水池。つまり「洪水氾濫の抑制ダム」として、低地の人びとの暮らしを守る役割を果たしているのである。

### 写真3. 棚田と貯水池



このほか、水源の確保や山腹の保温、生態系の維持など、多面的な機能を持つことも知る機会となった。

城跡をたどっていく道中、棚田への感謝の念が強まっていった。

### 5 地すべりの再発を防ぐ棚田

氷見市の中山間地帯の大部分は、新第三紀中新世の泥岩や凝灰岩で成り立っている。泥質堆積岩であるところから風化しやすく、崩れやすく、地すべりを起こす要因となっている。しかも、上層部は粗雑で多孔質、浸透性に富んでいる。

このため、上層部が乾燥してひび割れができると、亀裂が大きく広がる。そこに水が浸透し、粘土化して滑りやすくなった地層の境界面との摩擦が小さくなる。ついには平衡を保つことができなくなり、地すべりが起こる。

しかも、江戸中期から明治

中期にわたる新田開発政策によって、谷々が開かれた。このため、山林は伐採され、河床がえぐられ、泥岩層の岩盤が不安定となった。以後、地すべりが繰り返されてきた。

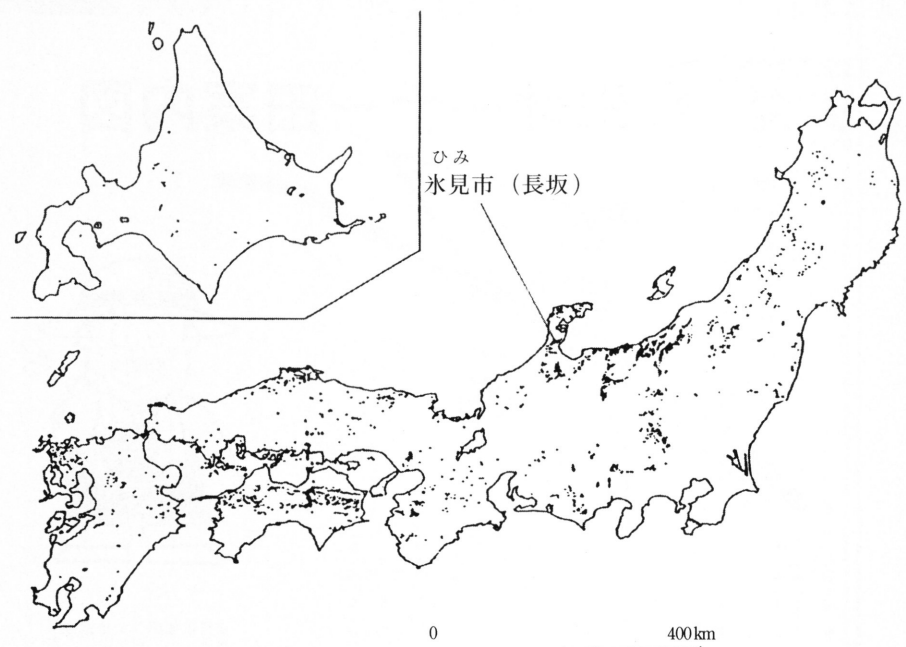
地すべりは、山くずれによる土石流のような大被害はないが、耕地に段差が生じる。数百メートルに及ぶ滑落が起きる。また、床下に亀裂が生じたり、人家を乗せながら地盤が移動するなど、人心の不安が大きい。田畑や人家が壊滅するという惨事も起きかねない。

長坂集落は、長坂泥岩と呼ばれる厚さ100メートル前後の黒色塊状泥岩層の上に、砂岩や礫岩を主とした泥岩が不整合な形で重なり合っている。このため「地すべり監視区域」に指定されている。

富山県では、このような泥流型地すべり対策として、堰堤や床固群を計画的に施行。防止につとめてきた。しかしながら堰堤設定だけでは不十分である。さりとて、地すべり予測のための地形測量や、移動測量調査は、技術的に手間がかかる。予算的にも無理がある。

図2. 日本の地すべり防止区域分布図

(地すべり学会; Landslide in Japan, 1980による)





これを補う役割として登場するのが棚田である。

第三紀層の休耕田に地すべりが多く発生していることは、調査によって明らかにされている。休耕田では、亀裂の幅も深さも大きいという。このため、一般に棚田では、稲刈り終了後、雪が降る前に荒起こしを行い、高い畦をつくって融雪水を貯留するという方法で、乾燥亀裂を防いでいる。

長坂集落の場合、積雪が多くて3月末ごろまで残っていることもあって、昔から4月に入って荒起こしや畦づくりを行っている。

このように、棚田は地すべりの再発防止に一役買っているのである。棚田の荒廃が進めば、災害の危険率が高まる。なんとしても維持保存を図らなければならない。

### 6 棚田オーナー制度

長坂集落では、氷見市役所からの「棚田オーナー制度の提案」をただちに受け入れた。

オーナー制度は、都市住民が放棄荒廃していく土地を借り受けて自ら耕作し、保全に役立てるという趣旨から生まれた。これに「体験コース」と「保全コース」の二つの方法がある。

前者は、借り受けた棚田を、オーナー自らが田起こしから収穫、脱穀までを行い、それによる収穫物は、すべて持ち帰ることができる。一方後者は、オーナーが会費と保全に対する協力金を支払い、田植えや稲刈りなどの体験はできるが、維持管理は地元に委託し、一定量の収穫米を受け取る。

写真4. 田植え風景

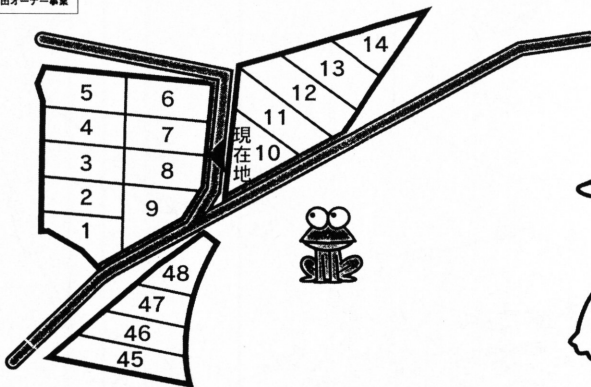


↑ 写真5・6

オーナー事業を支えた  
地元「椿衆」(上)と  
「ご婦人」(下)の皆さん



## 棚田オーナー田案内図



1 堀 様	5 後 藤 様	9 須 田 様	13 中野ロータリー クラブ 様	45 様
2 鈴木(有)様	6 井 上 様	10 大 岡 様	14 様	46 池 田 様
3 温 井 様	7 室 江 様	11 大 木 様		47 堤 様
4 水 野 様	8 狩 野(有)様	12 深 沢 様		48 中 村(有)様



← 図 3

氷見・中山間  
棚田オーナー事業  
棚田オーナー田案内図



長坂集落では、後者を選択した。そして、維持管理は村で組織した「椿衆」が担当し、草刈りや田植え、稲刈りのときは村総出で協力することを申し合わせた。

集落の人びとにとって、地区の景観のすばらしさが自慢であった。

富山湾を眼下にし、海の向こうには秀麗な立山連峰が横たわっている、加えて、<sup>ひな</sup>雛壇のように並んでいる棚田、その背後に森というように、山と水田と海との取り合わせによる魅力的な景観を持っている。そのうえ、海岸一带には、新鮮な海の幸を賞味することができる民宿が散在している。農業に必要な水は他の集落と異なり、<sup>からこ</sup>唐古池と<sup>うしろだ</sup>後田池の二つのため池で事足りる。

なによりも、地すべりの再発防止に、オーナーの方々の助けを借りることができる。集落に住む村民にとっての切実な願いが、棚田オーナー制度によってかなえられるのである。加えて、オーナー制度を通して都市住民との交流が生まれる。地域の活性化につながり、未来に対して明るい展望が開けることに希望が持てた。

### 7 棚田で人づくり、地域づくり

折りよく、国による棚田保全のための緊急基金で、農道や水路が整備された。「中山間地直接支払制度」による財政的支援も実施される。

また富山県でも、平成10年度から棚田保全活動のための助成支援と集落の活性化を目指して「棚田地域・水と土保全基金」を設けている。それによる助成金も加わる。氷見市による物心両面にわたる積極的な援助も心強かった。

こうした数々の好条件のもと、村民一体となってオーナー制度に取り組むこととし、つぎのことを決めた。

- ・一区画を100平方メートル（約30坪）前後とし、年間3万円で貸し出す。
- ・会員は田植えや稲刈りなどの農作業を体験し、収穫した米（玄米40キロ）と氷見市の農業特産品をセットとして受け取る。

平成11年に始められた企画に対して、応募者は44組。続く12年度は50組（昨年からの引き続き参加者が29組）いずれも、関東や中京、関西、北信越、県内の人たちで、なかには外国人家族（オー

写真7. 「長坂棚田米」と「氷見特産品」のセット

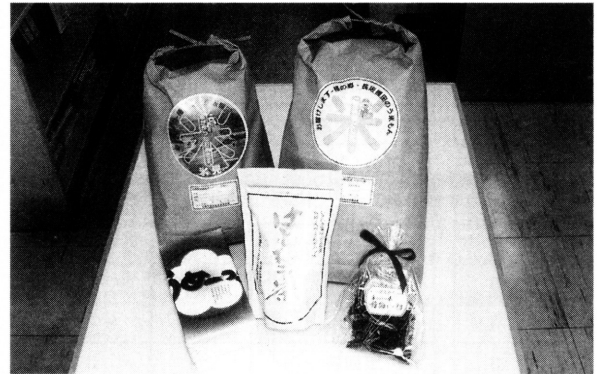


写真8. 稲刈りから結束作業を習うオーナー風景



ストラリア、スウェーデン）もいた。

12年度の稲刈り作業は、9月23、24日の2日間にわたって実施された。2日間とも小雨模様であったが、集まった会員たちは、「雨が降ってようがいまいが、作業に関係なし」とい<sup>が</sup>ながら、椿衆の指導のもとに稲刈りをし、はさ架け作業を行った。そして作業後は、村の主婦たちから昼食を振るまわれ、若者たちによる豊作を祝う獅子舞いの数々を鑑賞して解散した。

写真9. はさ架け風景



## 写真10. 豊作を祝う若者の獅子舞い風景



村総出の歓待と、小雨をついて集まった会員たちの熱い交流が繰り広げられた作業風景であった。

## 8 おわりに

人と自然との共生のシンボル棚田。多面的な機能を持つ棚田。

この貴重な棚田に対する保全の試みは着実に歩み出している。これを、より推進させなければならない。そのためにも、棚田のある周辺地域の学校が、学習の一環として子どもたちに農業の実体験をさせる。各地域の高令者学級や大学生らが草刈りや溝さらえなど、ボランティア活動をするのもよい。そうした活動を通して生物を育てる喜び

と、実のりの充実感を味わう。よりよい人間関係も築かれていく。

棚田は体験エリア、学習エリア、人との連帯エリア。農村と都市、大人と子どもたちとの交流エリアであり、楽しい思い出づくりのエリアでもある。

利にあうとか、あわない、という採算だけではかることのできない価値ある機会をつくり上げてくれる場なのである。なににもまして、国土を保全し、私たちの暮らしの安全を守ってくれる。

## 写真11. オーナー親子の作業風景



つぎの世代へ引き継ぐためにも、いま、棚田保全の課題が問われているのではないだろうか。